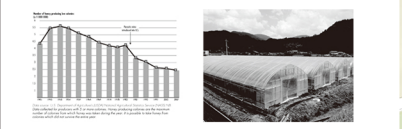


# Bee-Fruit-Hub

- 多芸輪中みつばち農園拠点計画

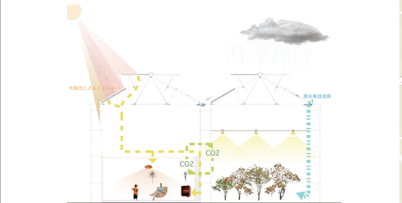
施設農業、地元農業、移動養蜂家が相互関係し合い、新しい有機農業のあり方を提案する。これが未来の農風景となる。



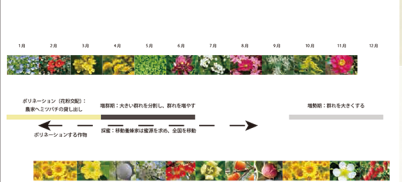
problem  
近年、ミツバチの大量死が世界的な問題になっている。しかし、私たちの食糧の1/3がポリネーション（花粉交配用）のミツバチによって受粉され、つくられている。現在のミツバチの不足は、私たちの将来に関わる大問題なのだ。大規模温室への注目があるが、日本らしさが全く見られない状況だ。



program1  
養蜂、エネルギー自給自足の温室と周辺農地が相互に関係し合う、新しい有機農業あり方を提案する。移動養蜂家を受け入れられるような農業集落が、新しい農業風景を生み出す。



program2  
養蜂、エネルギー自給自足の温室と周辺農地が相互に関係し合う、新しい有機農業あり方を提案する。温室の中に施設を入れることで、温室内での人と植物の関係や、建物の温室とマスの関係をエネルギーや栽培の観点から相互関係を生み出す。



Program3  
農園の年間スケジュールである。温室内で育てる作物はミツバチによるポリネーションが必要な作物を温室で育てる。温室内外でミツバチが育ち、作物が育つ、相互関係が成り立つようなスケジュールを構成する。

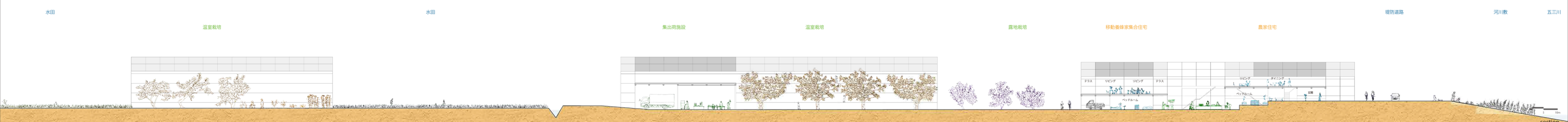
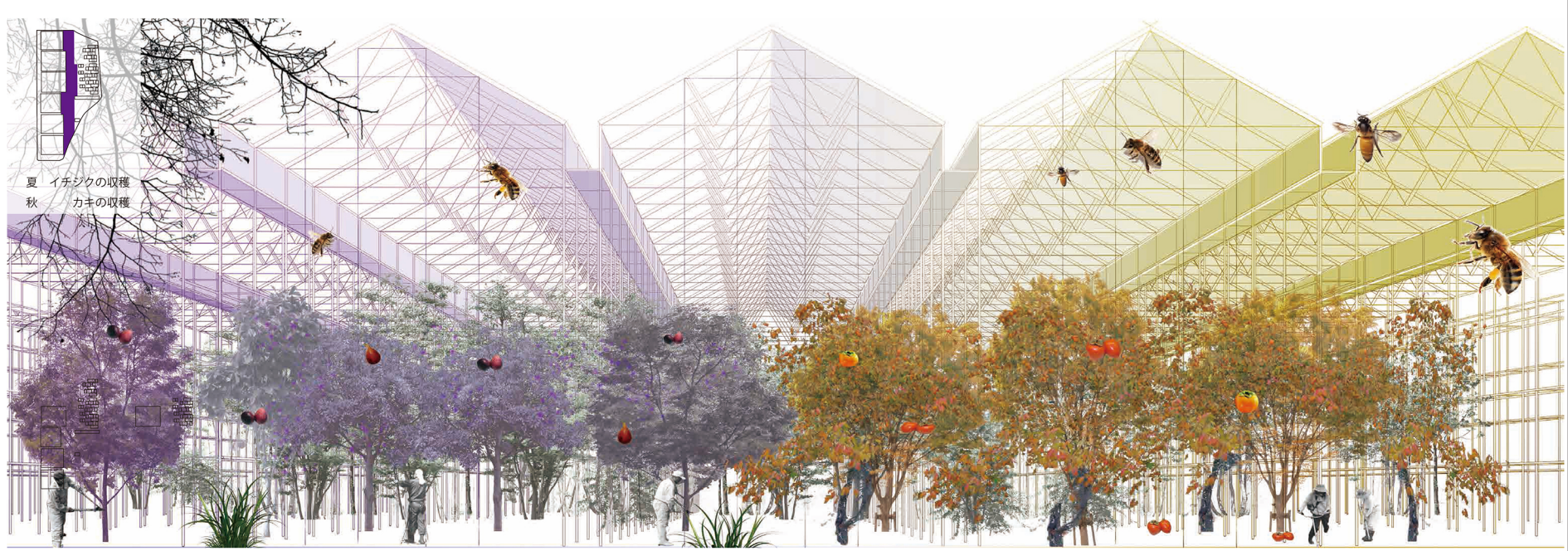
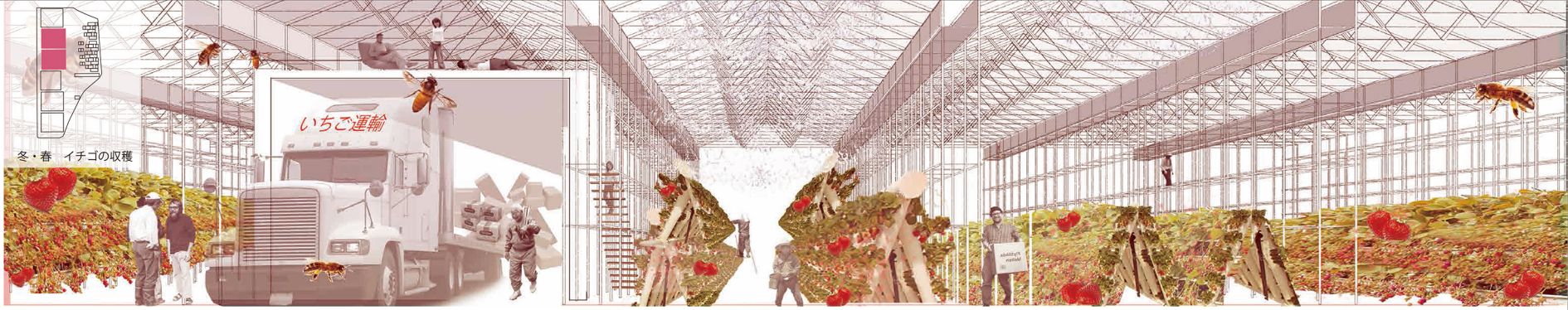


Site  
近代養蜂発祥の岐阜県の養老郡養老町釜釜。かつて小輪中であり、堤防集落の間を敷地とする。堤防集落は河川から線形に土地利用している。河川が多く、河川敷と周囲の水田をミツバチの蜜源帯とする。



Detail drawing  
温室1ユニットのプロトタイプを考える。最小限の村で作れることを考慮する。設備等をダブルの柱内に収め、温室だけでなく住居等の構造体としても利用可能にし、様々な汎用性を高める。

Diagram1  
農園の構成ダイアグラムである。周囲の水田の割に合わせて、短冊状に分割する。川側から人、作物、ミツバチ、車の順にゾーンを行う。周囲の水田のあぜ道を意識するように農道のサーキュレーションを作る。そして、北側と南側にある既存集落を繋げるように、農園内の集落を配置していく。



section